

プロジェクトマネージャ

1. はじめに

1.1 総評

プロジェクトマネジメントに関する体系立った知識と実際の経験が求められるマネジメント色の濃い問題構成になっていました。前回、不確かさや変化への適応を前提とする問題が増えましたが、今回も同様で、午後Ⅰ試験の3問すべてで適応型(アジャイル型)開発アプローチが取り上げられていました。

午前Ⅱ試験の特徴は、分野別の出題数の変化および新規問題と計算問題の多さです。時間面での難易度がとても高い試験といえます。

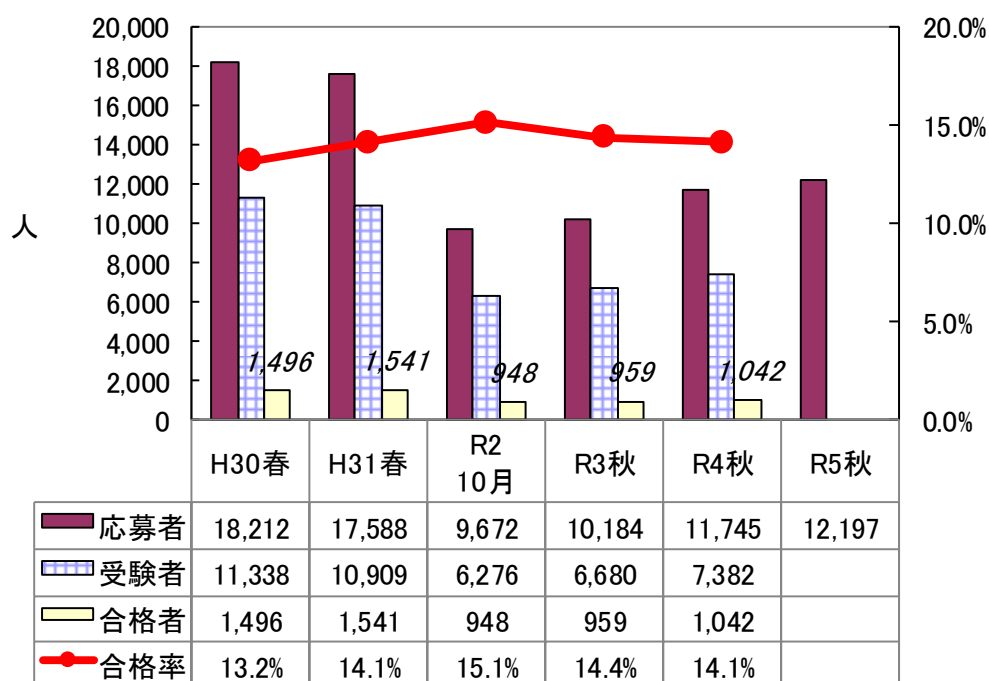
午後Ⅰ試験では、独自の体験価値を提供するシステム開発プロジェクトでの自律的なマネジメント、協力会社とのイコールパートナーシップの実現のための取組み、予兆検知システムの開発を題材とした構想・企画の策定などが扱われています。いずれも、適応型開発アプローチの事例で、昨年が続いて自律的なマネジメントについて問われた点も目を引きま

す。

午後Ⅱ試験では、プロジェクトマネジメント計画のテーラリングとプロジェクト終結時の評価の問題が出題されました。2問ともに統合マネジメントからの出題という点と、前回に続き、設問ウで「今後の改善点」が問われなかった点が特徴です。

各試験の難易度は、午前Ⅱ試験は高く、午後Ⅰ試験は標準的、午後Ⅱ試験は高いといえるでしょう。

1.2 受験者数の推移



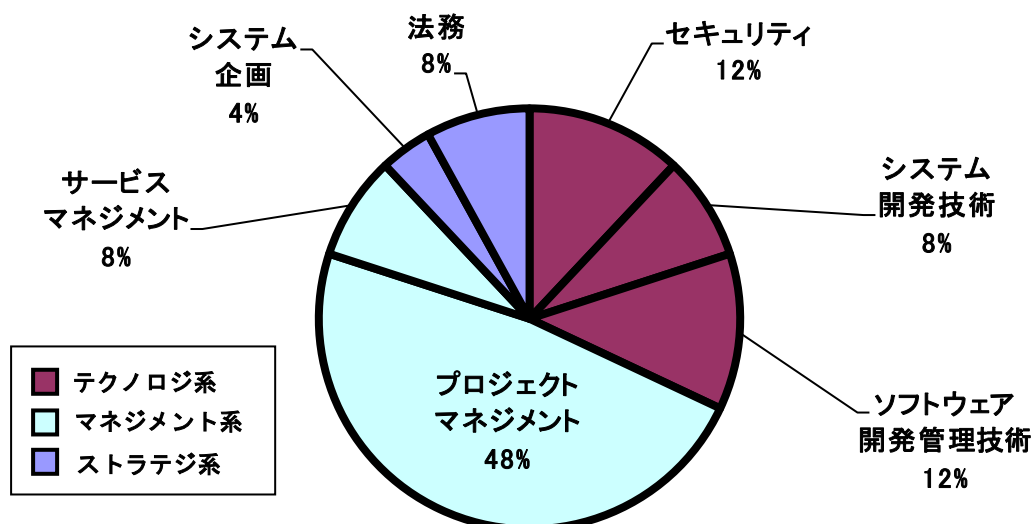
2. 午前Ⅱ問題の分析

2.1 問題テーマの特徴

午前Ⅱ問題の出題分野は、重点分野である「プロジェクトマネジメント」と「セキュリティ」、重点分野以外の「システム開発技術」「ソフトウェア開発管理技術」「サービスマネジメント」「システム企画」「法務」の計7分野です。今回の試験では、分野別の出題数に変化が見られ、「プロジェクトマネジメント」の出題数が2問減り、その分、「システム開発技術」と「ソフトウェア開発管理技術」の出題数が1問ずつ増えました。表とグラフで示すと次のとおりです。

また、「システム開発技術」や「ソフトウェア開発管理技術」の分野だけでなく、「サービスマネジメント」分野のTCO(総所有費用)の問題や「システム企画」分野の要件定義の評価の問題、「法務」分野の36協定についての問題も、プロジェクトマネージャとして押さえておくべき専門知識ともいえるテーマでした。

出題分野(重点分野は太字)	出題比率	出題数	前回との増減
セキュリティ	12%	3 問	
システム開発技術	8%	2 問	+1 問
ソフトウェア開発管理技術	12%	3 問	+1 問
プロジェクトマネジメント	48%	12 問	-2 問
サービスマネジメント	8%	2 問	
システム企画	4%	1 問	
法務	8%	2 問	



今回の試験の特徴は、新規問題が多いこと、そして計算問題が6問も出題されたことが挙げられます。

過去のプロジェクトマネージャ試験からの再出題問題(過去問題)は25問中8問とこれまでにない少なさでした。また、プロジェクトマネジメント分野12問中では7問と半分以上が新規問題です。

時間的難易度に影響する計算問題も6問と多く、そのうち3問が新規問題でした。また、計算問題のうち3問は、ページ全体を使って図や条件が提示されており、問題内容を把握するだけでも時間がかかったと思われます。計算問題で時間を使いすぎると、本来なら解ける問題を解かないうちに時間切れになるおそれがありますので、時間配分に注意する必要のある試験でした。

前回、出題されなかったため、今回の試験で出題されるのかどうか注目していたPMBOKからの問題は、今回の試験でも出題されず、その分、JIS Q 21500:2018から4問が出題されていました。

プロジェクトマネジメント分野で新しく出題されたテーマでは、アジャイル宣言の背後にある原則に照らして適切な教訓を選ぶ問題やJIS Q 21500からのステークホルダのマネジメントの活動、プロジェクトバッファを含めた全体の所要日数を計算する問題、ファンクションポイント数を計算する問題が目を引きました。また、セキュリティ分野の問題のうち、ファジングの問題はプロジェクトマネージャ試験の過去問題で、他の2問はISO/IEC 15408とデジタルフォレンジックスについて問われた新規問題でした。

2.2 難易度の特徴

午前Ⅱ問題の難易度は受験者の知識習得状況によって感じ方が異なります。問題テーマ難易度一覧表で「C：難」と判定されている問題は、過去に出題されていない知識や内容を問うものと、時間を多く要する計算問題です。

プロジェクトマネジメント分野では、アジャイル宣言の背後にある原則に照らして適切な教訓を選ぶ問題や、プロジェクトバッファを含めた全体の所要日数の計算問題、プロジェクトの最少の所要日数の計算問題、コミュニケーションコストの計算問題、ファンクションポイント数の計算問題の5問の難易度を高いと判断しました。その他の分野の問題では、TCO(総所有費用)の計算問題、JIS Q 20000-1の内部監査、プロバイダ責任制限法、ISO/IEC 15408が問われた問題が、難しかったと考えます。

午前Ⅱ試験は、時間的な難易度がとても高い試験だったといえるでしょう。

2.3 問題テーマ難易度一覧表

問	テーマ	難易度
1	アジャイル宣言の背後にある原則	C
2	JIS Q 21500 プロジェクト全体計画の作成の目的	B
3	JIS Q 21500 計画のプロセス群：スコープの定義	A
4	JIS Q 21500 ステークホルダのマネジメントの活動	B
5	計算問題 EVM 完成時総コスト見積り (EAC)	B
6	計算問題 プロジェクトバッファを含めた全体の所要日数	C
7	計算問題 PDM 最少の所要日数	C
8	クリティカルチェーン法の実施例	A
9	計算問題 コミュニケーションコスト	C
10	計算問題 ファンクションポイント数	C
11	EMV(期待金額価値)の算出式	A
12	JIS Q 21500 リスクの計画プロセス	A
13	レビューの名称と説明の組合せ	B
14	オブジェクト指向 汎化	B
15	アジャイル開発 スクラムのルール	B
16	JIS X 0160 テクニカルプロセスの説明	B
17	著作権 発生する問題	B
18	計算問題 TCO(総所有費用)	C
19	JIS Q 20000-1 内部監査	C
20	要件定義プロセス 要件が検証可能な例	B
21	プロバイダ責任制限法 送信防止措置	C
22	労働基準法 36 協定	B
23	ISO/IEC 15408 の説明	C
24	デジタルフォレンジックス	B
25	脆弱性検査手法 ファジング	A

注) 難易度は3段階評価で、Cが難、Aが易を意味する。

3. 午後 I 問題の分析

3.1 全体の出題傾向及び難易度について

今回の午後 I 試験の特徴は、適応型(アジャイル型)開発アプローチを用いるプロジェクト開発という事例についての問題であったことです。3 問ともに、開発の成果を確認しながら修正する、顧客価値が受託当初から変わっていく、探索的な進め方で要件を定義するという状況で、そのことを受け入れるだけでなく積極的に体験価値や顧客価値を創出するための取組みについて問われています。前回、チームビルディングで問われた心理的安全性や自律型マネジメントが、今回はプロジェクトチームのマネジメントとして再度問われていました。適応型(アジャイル型)開発アプローチの出題頻度が高まっていることから、これらのテーマの出題頻度も高くなっているといえるでしょう。また、今回の試験では、協力会社との新しい関係、イコールパートナーシップが取り上げられたのも目を引きます。プロジェクトチーム内の自律的マネジメントと同様に、協力会社とも発注者、受注者という関係に縛られない、より良い対等な共創関係を探求するという、これまでにないテーマでした。

また、今回の試験では、OODA ループや、準委任契約に新設された成果完成型などの知識問題が出題されていたのも目をひきました。

問題文の分量は、3 問ともに設問まで合わせて 4~5 ページと平均的で、問題による差はあまりありません。解答数も 7~10 で、解答字数のボリュームからみても、選んだ問題で差がつくということはありませんでした。

難易度も標準的で、問ごとの差はあまりありませんが、解答ポイントの見つけやすさなどから、敢えて言うなら問 3 がやや難しめと評価できるでしょう。試験全体としては、標準的です。

3.2 各問題のテーマ、特徴

問 1 は、不動産業や製造業を中心にシステム構築をしている IT ベンダーが、他の 2 社と新会社を設立するという状況で、新会社独自の体験価値を提供するシステムを開発するという状況での事例です。3 社からのメンバーで構成されるプロジェクトでの自律的なマネジメントや支援型リーダーシップなど、プロジェクトチームのマネジメントについて問われています。メンバーがチャレンジする上でのプロジェクトの環境やプロジェクトの行動の基本原則の狙いについて問われた問題は、解答をどのようにまとめるかでやや悩む問いはありますが、基本的には解答の根拠がきちんと示されている問題で、難易度は標準的です。

問 2 は、これまで予測型開発アプローチでプロジェクトをマネジメントしてきた課長が、顧客価値の変化に対応するために適応型開発アプローチへのシフトを準備するという状況で、協力会社とイコールパートナーシップ(EPS)の実現を目指すという事例になっています。成果完成型の適用やコスト・プラス・インセンティブ・フィー(CPIF)契約の採用を検討することで生じさせようとした効果に関する設問

は、解答のポイントを見つけにくい問題でしたが、基本的に、解答の根拠はきちんと示されている問題でした。また、午後 I 問題では珍しく、知識問題として、OODA ループや、PMBOK 第 7 版の 12 の原理・原則でプロジェクトマネジメントの標準として示されている適応力と回復力、準委任契約に新設された成果完成型、CPIF 契約について問われていました。難易度は標準的と判断しました。

問 3 は、化学品製造業である企業が、機器類の障害の予兆検知システムを開発するという事例の中で、プロジェクトの構想・企画の策定や、プロジェクトフェーズの設定に関して問われています。具体的には、プロジェクトの目的説明に技術者全員を集めた狙いや、IT ベンダーに依頼した支援内容、要件定義メンバーに期待した役割、フェーズごとの特性などが問われていますが、解答の根拠を見つけにくい設問もあり、3 問のなかでは、やや難易度が高めの問題といえるでしょう。

3.3 問題テーマ難易度一覧表

問	テーマ	難易度
1	価値の共創を目指すプロジェクトチームのマネジメント	B
2	システム開発プロジェクトにおけるイコールパートナーシップ	B
3	化学品製造業における予兆検知システム	C

注) 難易度は 3 段階評価で、C が難、A が易を意味する。

4. 午後Ⅱ問題の分析

4.1 全体の出題傾向及び難易度について

今回の午後Ⅱ試験は、問 1 が「プロジェクトマネジメント計画の修整(テラリング)について」、問 2 が「組織のプロジェクトマネジメント能力の向上につながるプロジェクト終結時の評価について」というテーマで、どちらの問題も統合マネジメントから出題されていました。

前回の試験で問われなかった設問ウの「今後の改善点」は、今回の試験でも問われず、設問ウでは、それぞれに異なる論点について論じることが求められました。

加えて、前回、前々回と続いた設問アで求められる論点が 3 つという傾向は、今回も続きました。800 字のなかで 3 つの論点を述べるには、あらかじめ、どの論点をどれくらいの字数で述べるかを決めておくことが重要です。さらに、今回は、プロジェクトの“特徴”ではなく“目標”や“独自性”が求められています。設問アの前半部分を、あらかじめ準備している受験者の方が多いと思われますが、論述前に、求められている論点が何かをしっかりと確認し、それに応じて修正する必要があります。

また、プロジェクトマネジメント計画の修整やプロジェクト終結時の評価は、前回から試験の対象者になった「マネジメント業務の一部を分担する人」がメインで担当する業務ではないため、該当する受験者にはプロジェクトマネージャ経験者よりもさらに難易度が高いと感じられたでしょう。

4.2 各問題のテーマ、特徴

問 1 では、プロジェクトを取り巻く環境、スコープ定義の精度、ステークホルダの関与度や影響度、プロジェクトチームの成熟度などといったプロジェクトの独自性を考慮して、参照したマネジメントの方法を修整することについての論述が求められていました。ただし、時間、コスト、品質といった QCD 以外で重要と考えたプロジェクトマネジメントの対象の修整について論じることが求められていることと、修整について論じるだけでなく、設問ウで修整の有効性をモニタリングした方法や結果・評価などについて論じることが求められている点が、この問題の難易度を高めている要因です。

問 2 は、プロジェクト終結時の評価がテーマの問題です。平成 25 年に工程の完了評価について出題されたことがあります。プロジェクト終結時の評価がテーマとなったのはこれが初めてです。また、評価で取り扱う内容が、重要な目標の一部を達成できずにプロジェクトを終結する目標未達成に限定されています。平成 30 年に本稼働間近で発見された問題への対応というテーマで、予定された稼働日に間に合わず暫定的な稼働とする対応が論点となったことがありましたが、目標の一部を未達成のままプロジェクトを終結することについて論述が求められたのは、初めてのことです。事前に準備していた事例は成功事例に限定されていたと思われますので、目標未達成の内容や程度をどうすべきか悩んだ受験者も多かったでしょう。また、設問ウでは、目標未達成の原因からプロジェクトマネジメントの

観点で立案した再発防止策やそれを組織に定着させるための工夫を論じることが求められていますので、プロジェクトマネジメント能力の向上と結びつけられる目標未達成の経緯・原因であることが重要です。この問題は、事前準備ができなかったという点からも難易度が高いといえます。

4.3 問題テーマ難易度一覧表

問	テーマ	難易度
1	プロジェクトマネジメント計画の修整(テラリング)について	C
2	組織のプロジェクトマネジメント能力の向上につながるプロジェクト終結時の評価について	C

注) 難易度は3段階評価で、Cが難、Aが易を意味する。

5. 今後の対策

5.1 午前Ⅱ対策

今回、「プロジェクトマネジメント」からの出題が48%となり50%を切りましたが、「システム開発技術」「ソフトウェア開発管理技術」と合わせると3分野で68%を占めている点は変わりませんでした。次回の試験でも、この3分野で7割近くの問題が出題されると思われます。試験対策を考える場合、この3分野を重点的に学習することが効果的です。

午前Ⅱ試験で令和3年まで毎回出題されていたPMBOKからの問題は、今回の試験でも出題されず、プロジェクトマネージャ試験のシラバスなどの用語の基になっているJIS Q 21500からは、これまでで一番多い4問が出題されていました。PMBOKガイド第7版ではマネジメントプロセスが廃止されていますので、PMBOKからの出題が難しいという面はあると思いますが、今回の午前Ⅰ試験ではPMBOK第7版から出題されていたので、次回の試験でも、PMBOKのモデル・方法・作成物などを中心に出题の可能性は考えられます。対策としてはこれらに重点をおいた学習をお勧めします。共通フレームについての出題は、最近では、ほとんど見られなくなっていますが、今回は、「ソフトウェア開発管理技術」の問題として共通フレームの元になっているJIS X 0160からテクニカルプロセスについて出題されていました。

今回の試験では、プロジェクトマネージャ試験からの再出題問題が8問となり3割強にまで減り、その分新規問題が増えていました。再出題問題が少ないためか、これまでの2回前の試験からの再出題問題が多いという傾向も見られず、令和3年度の問題から2問、平成29年度の問題から2問、後は平成26年、27年、28年、令和2年の問題からそれぞれ1問が出題されていました。

これらの状況を考え合わせると、テキストによる学習で専門知識をしっかりと理解した後は、過去に出題された本試験問題の学習を重点的に実施するとよいでしょう。上記3分野について過去問題を学習することが効率的です。過去問題の範囲ですが、令和4年度から平成27年の問題を、バランスよく繰り返し実施してください。過去問題の学習では、PMBOKに基づいた問題では、マネジメントプロセスについての問題は学習する必要はありませんが、その他の問題は、第7版でどうなっているかを確認しておくといよいでしょう。また、JIS Q 21500からの過去問題は必ずしっかりと目を通してマネジメントプロセスの目的などを確認しておいてください。そして、最近、計算問題の出題数が増えています。計算問題では、新規問題も多いのですが、過去問題から出題されるものもありますので、計算問題が苦手な方は特に、過去問題で計算問題を繰り返し行って、ある程度パターンの決まっている計算の解き方をしっかりと習得しておいてください。

最後に、「セキュリティ」ですが、次回も3問の出題が予想されます。今回の試験では、2問が新規問題で、1問がプロジェクトマネージャ試験からの再出題問題でした。「セキュリティ」の学習をきちんと行うにはかなりの時間がかかります。3問のためにその時間をとるのが難しい場合には、ある程度の割り切りが必要になるかと思います。プロジェクトマネー

ジャ試験では「セキュリティ」は重要分野ですが、技術レベルは3のままです。情報処理安全確保支援士試験の問題には技術レベルが4のものが含まれていますが、応用情報技術者試験の問題はすべて技術レベルが3までです。したがって「セキュリティ」を過去問題で学習する場合、まずは、プロジェクトマネージャ試験で出題された「セキュリティ」分野の問題を学習し、加えて、応用情報技術者試験の「セキュリティ」分野の問題だけを直近8回分(4年分)ほど行うようにするとよいでしょう。

5.2 午後Ⅰ対策

プロジェクトマネージャ試験では、現実のプロジェクトにおいても、実際に起こり得る内容の事例での出題が予想されます。特定のマネジメント分野に的を絞った問題や、工程に的を絞った問題、総合問題と、午後Ⅰ試験の出題内容は毎回さまざまです。しかし、問われているプロジェクトマネジメントの基本的な考え方や、設問で問われているポイントは、難解なものは少なく、問題事例で示されている課題へのプロジェクトマネージャとしての適応力が問われるという点で一致しています。今回の試験では、3問全てで適応型開発アプローチのプロジェクトについて出題されていました。この傾向は、今後も続くことが予想されます。そして、このアジャイル型開発が取り上げられるため、自律的なマネジメントが取り上げられることも増えています。今回の試験では、協力会社との新しい関係であるイコールパートナーシップについても出題されていました。

しかし、どのような事例であっても、問題文で説明されている状況において、プロジェクトの特徴と重要ポイントがどこにあるのかをきちんと問題文から読み取って、プロジェクトマネージャとしてふさわしい対応などが問われているという点は変わりません。

これらを念頭に置きながら、SaaSを活用したソフトウェアパッケージを導入する場合の留意点、見積りや契約上の留意点、予算管理のための実績集計の仕組み、スケジュール変更の手法やリスクへの対応、契約形態に応じた作業指示方法、品質管理の観点などの基本的な知識やノウハウをきちんと押さえた学習が必要と思われます。また、アジャイル型開発とそれに伴う自律的なマネジメントや支援型リーダーシップについては、今後も出題が予想されますので、アジャイル型開発の基本的な事項について学習しておくといよいでしょう。TAC教材の「PM 事例集」では、アジャイル型開発について用語をまとめていますので、ぜひ活用してください。

午後Ⅰ試験の対策は、プロジェクトマネジメントの体系だった学習をして基礎的な専門知識を身につけた上で、過去の本試験問題で演習を繰り返すことが中心になります。最近の上流工程やアジャイル型開発の問題への対応力をつけるには、令和2年度以降の問題を繰り返すとよいでしょう。また、午後Ⅰ問題の解答制限字数は、25～40字で、1問あたり的小問数は7～10問程度に揃えられるようになりました。時間的な難易度は以前よりは低くなったといえますが、決められた制限字数内に解答をまとめるという作業は、考えている以上に時間がかかるものです。演習問題を解く場合には、解答ポイントを押さえるだけでなく、きちんと用紙に制限字数を守って解答を書く作業を行うことによって、重要ポイントに絞っ

て簡潔に文章をまとめるトレーニングをしておくことがとても大切です。

5.3 午後Ⅱ対策

問題数が 2 問に変更にされて以降、プロジェクトマネジメントにおける基本的なマネジメントについて、オーソドックスな内容が問われてきました。しかしながら、基本的なマネジメントに関する出題が一通り終わったためか、最近では、経験事例そのものは持っていると思われる題材をテーマにしているものの、事例に制限がつけられるようになっていきます。

問題文の指示に沿う形での論述や、何らかの論述のヒントを問題文から得ることはある程度は可能ですが、問題文の中で論述に必要なすべてのキーワードが示されるというわけではありませんので、試験対策としては、マネジメントごとの最低限のキーワードを自分で整理して、マネジメントの流れとともに理解しておくことが必要といえるでしょう。

また、設問の指示どおりに、論点に過不足がないように論じる練習も大切です。最近では、設問アにおいて、3つの論点が求められることが多くなっています。設問アでは字数が 800 字以内ですので、あらかじめ論点ごとの字数をある程度見積もっておくことも大切です。論点が多い場合に注意すべき点は、論点の書き分けです。最初の論点の中でつい 2 つ目の論点まで述べてしまいがちなので、最初から、その節で何を述べるのかについての方針を定めてから論述するようにしましょう。

前回の試験で、設問ウの定番の論点であった「今後の改善点」がなくなったことで、より時間的な難易度が高くなったと思われます。今回の試験でも、設問ウではそれぞれに異なる論点が問われており、この傾向が続いた場合には、設問ウの論述に時間がかかるため、以前よりも速く論述することが求められます。論述演習によって論述設計を固めるまでの時間の短縮化や、手書きへの慣れなどがこれまで以上に必要になると考えます。

平成 26 年から令和 5 年までの 10 回の試験で、最も出題されたテーマは、統合マネジメントです。2 番目以降には、リスク、資源、品質、ステークホルダ、スケジュールマネジメントが並びます。いずれも、重要なマネジメントであり、どのテーマが出題されてもおかしくありません。

午後Ⅱ試験で大切なことは、問題文の趣旨に沿いつつ、設問で指示された論点について、過不足なく具体的に論述することです。設問アの最初の論点は“プロジェクトの特徴”であることが続いていましたが、最近では、“概要”であったり、“目標”であったり、“独自性”であったりと問題ごとによって変わっています。今後も“特徴”“概要”などは変化する可能性が高いため、最初の論点を思い込みで述べてしまわないように、きちんと確認してから論述の構成の検討を始めるようにしてください。

午後Ⅱ試験の対策としては、自分の用意したプロジェクト事例を、与えられた論点に沿うものに短時間でカスタマイズすることに重点を置いた論述練習をすると効果的です。また、問題文に具体例のヒントが提示されない場合でも自分で適切な手法やキーワードを述べるができるように、マネジメントごとに原則的な事例をまとめておくことも効果的です。基本的には、どの分野が出題されてもおかしくありませんので、それぞれの分野に対応でき

るように、分野ごとの基本的なプロジェクトマネジメントの進め方についてはきちんと押さえておきましょう。

最後に、自分で書いた論文を第三者に添削してもらうことができると、自分の思い込みや読み手に伝わっていないことなどを明らかにすることができます。自分で推敲しているだけでは気付けない点を指摘してもらうことができるので効果的です。ぜひ、試してみてください。

令和6年度春期の情報処理技術者試験・ 情報処理安全確保支援士試験の対策も **TAC**にお任せください！

< 企業ご担当者様へ人気のおススメコースをご紹介します >

合格に必要な知識を効率よくマスターできるコンテンツ

情報処理安全確保支援士Webコース

情報処理安全確保支援士受験のためのベーシックコースです。少ない時間で効率的に学習ができるように専門知識の重要論点を集約したポイント講義（Web動画）は、20テーマ（1テーマあたり30分）を配信します。

試験対策	42,000円（10%税込）
午前Ⅰ免除	36,000円（10%税込）



充実した添削指導の午後Ⅱ対策が合格のポイント

ITストラテジストWebコース

午前・午後の試験に対応したアウトプットトレーニングで、知識の定着を図ります。講義動画（全4回、1回あたり30分）は午後Ⅰの分析と解法テクニック、論述式問題への取組み方を具体的な問題で解説します。

試験対策	54,000円（10%税込）
午前Ⅰ免除	48,000円（10%税込）



合格に必要な知識を効率よくマスターできるコンテンツ

ネットワークスペシャリストWebコース

少ない時間で効率的に学習ができるように工夫されたコースです。専門知識（午前Ⅱ）の重要論点を集約したポイント講義は、20テーマ（1テーマあたり30分）を配信します。

試験対策	42,000円（10%税込）
午前Ⅰ免除	36,000円（10%税込）



充実した添削指導の午後Ⅱ対策が合格のポイント

ITサービスマネージャWebコース

午前・午後の試験に対応したアウトプットトレーニングで、知識の定着を図ります。講義動画（全4回、1回あたり30分）は午後Ⅰの分析と解法テクニック、論述式問題への取組み方を具体的な問題で解説します。

試験対策	54,000円（10%税込）
午前Ⅰ免除	48,000円（10%税込）



充実した添削指導の午後Ⅱ対策が合格のポイント

システムアーキテクトWebコース

午前・午後の試験に対応したアウトプットトレーニングで、知識の定着を図ります。講義動画（全4回、1回あたり30分）は午後Ⅰの分析と解法テクニック、論述式問題への取組み方を具体的な問題で解説します。

試験対策	54,000円（10%税込）
午前Ⅰ免除	48,000円（10%税込）



知識の総整理を短期間で行う問題演習中心のコース

応用情報技術者 徹底演習コース

学習経験者、再受験者対象の午後試験対策コースです。午後試験の出題分野ごとに出題頻度や重要度の高いテーマを精選しました。その解法を学び、短期間で効率よく知識の総整理と得点力アップを目指します。

23,100円（10%税込）



※上記コースは2024年春試験向けコースとなります。各コース名はTAC法人向け人材教育サービス紹介サイト「TAC.biz」の当該コース紹介ページへのリンクとなっております。なお、2024年秋試験向けコースにつきましては、別途ご案内いたします（2024年春頃を予定しています）。

お問合せはこちら

TAC株式会社 法人事業部

東日本エリア：東京都千代田区神田三崎町3-2-18

東海・北陸エリア：名古屋市中村区則武1-1-7 NEWNO名古屋駅西8F

西日本エリア：大阪府大阪市北区中崎西3-4-12 梅田センタービル5F

03-5276-9802

052-977-1051

06-6371-1075